

医学フォーラム

「私の歩んできた道」

両眼視と単眼視の間

～斜位という創造性～

九州大学名誉教授 北山 修
白鷗大学副学長

《プロフィール》



略歴

1972年3月	京都府立医科大学卒業
1974年3月	札幌医科大学内科研修生終了
1976年10月	ロンドン大学精神医学研究所卒業後研修終了
1980年4月～1991年9月	北山医院院長
1991年10月～1994年9月	九州大学教育学部助教授
1994年10月～2010年3月	九州大学教育学部教授
2000年4月～2010年3月	九州大学大学院人間環境学研究院教授
2001年4月～2010年3月	九州大学大学院医学研究院兼任教授
2013年4月～現在	白鷗大学副学長・特任教授

主な著書

北山 修：『悲劇の発生論—精神分析の理解のために』金剛出版（1982）.
 北山 修：『錯覚と脱錯覚—ウィニコットの臨床感覚岩崎学術出版社（1985）.
 北山 修：『心の消化と排出—文字通りの体験が比喩になる過程』創元社（1988）.
 北山 修：『見るなの禁止』岩崎学術出版社（1993）.
 北山 修：『劇的な精神分析入門』みすず書房（2007）.
 北山 修：『覆いをとること・つくること』岩崎学術出版社（2009）.
 Osamu Kitayama：「Prohibition of Don't Look」Iwasaki Gakujutsu Shuppansha（2010）.
 北山 修：『幻滅論 増補版』みすず書房（2012）.
 北山 修：『評価の分かれるところに～「私」の精神分析的な精神療法～』誠信書房、2013.
 北山 修：『意味としての心～「私」の精神分析用語辞典』みすず書房、2014.

学会関係

日本精神分析学会前会長

表彰

1988年12月 各務記念財団 優秀著書表彰（「心の消化と排泄」）
 2011年11月 日本精神分析学会 学会賞
 （1971年12月 日本レコード大賞作詞賞 「戦争を知らない子供たち」）

はじめに

このような貴重な機会を設けて頂き、編集委員会に心より感謝する。今回は、皆様からはよく見えない、私にもよく見えていない、自分自身の目のことと創造性との関係について書きたい。さらには、私が読んだ話や人から聞いた噂話を信用せず、自らこの耳でしっかり本人から聞いた話だけをもっぱら尊重する、精神科医という仕事について歴史を語ろう。先に結論を言うなら、私たちにとっては「百聞は一見にしかず」ではないということなのだ。

兎と亀

まずは、精神科医としての私の臨床では、患者さんたちの人生を扱うが、その技法から紹介する。人は、魂の柔らかい幼児期に書き込まれた「筋書き」を、相手役を変えながら一生繰り返し返すことがある。その基本の「台本」の相手役は、幼児期の重要な他者、つまり両親であることが多いが、その他者との関係性が現在の台本の元になる。それで、その筋書きを言葉でなぞるためには、筋書きの読み出し方と書き方を学ばねばならない。その勉強の材料として、人が共有する昔話や神話がある。

例えば、人には表と裏があるものと捉え、生産的な女性の背後に傷ついた鶴がいたという「鶴の恩返し」というお話が参考になる。鶴女房の彼女は、お世話になった男性への「恩返し」のために自分を傷つけてまでして献身的になるというわけだ。そのように、昔話は消耗を繰り返しておられる患者さんと、その生き方を考えてみる際に格好の材料となる。そこで、この北山もまた「つう」のような自虐的世話役を生きているのではないかと考える方が周囲にいらっしゃるが、まさに、生産的な私の正体が傷ついた鶴だというのは私の真実の一面だ。

しかしながら、それだけでは大いに不足があり、自覚するところでは、イソップの「兎と亀」という話を加えた方が、私の生活の全体像としてはさらに正確になる。最近特にその内容と人生との重なり合いがはっきりとしてきた。つま

り「兎と亀」の物語も、一人の人間の人格の二重性の話として読めば、こちらは裏表というより昼夜の二重性だ。まずは、昼間人前に出て元気であり、時に跳ねまわる兎だが、その後ろには、確かにいろいろなことで傷つき、疲れきった兎がいる。同様に、午前中に一気に呵成に書き散らして、午後にはそれを目を凝らしてチェックし、コンピューター画面を見つめながら修正・加工して神経を疲れさせている私がいる。昼間遊んで、あるいは懸命に働き、夜になり疲れ果てて目を閉じると、あるいは勝って良い気分になり目を閉じると、倒れて眠る兎の後ろからゆっくりと亀が立ち現れる。この亀は、ほとんど目を閉じ、歩みはのろく、夜は夢と眠りの中にいて、泥の中でまさに泥亀になる。ほとんど甲羅の中に閉じこもっているこの亀が夜間どこで何をしているのかは自分でも把握していない。朝方になり、亀は覚醒に向かうところでは哲学者のように沈黙思考している。若い頃はここで子どもたちが私を起こしにかけ、猫が顔の上に乗ってきたり、目覚ましが鳴って飛び起きたりしたが、年老いて周囲がおだやかとなり、この中途半端な時間が着実に増えて来た。

前にこの考える亀のことを、自分に正直な「素の自分」だと書いた。その自分が朝起きると、新しい人や患者に何を言うべきか考えたり、歌や原稿のアイデアも生まれたりする。友人に謝ろうとか、何を買おうとかか思いついたり、眠りにまた落ちたり。人生を創るためのクリエイティビティはそこが現場だし、精神科臨床では、皆さまと共にこの考える亀になって自分の亀を思うことが必要だと考える。

私の場合は、昼間の執筆活動では兎と亀の両者の競争と協力関係が生まれ、例えば朝方亀が思いついたことを日中兎が選択的に書き記し、推敲し書き直すところが外向きの創造性の核心となる。この元気な兎と愚鈍な亀の連携、これこそが私の人生が多産でいられた理由なのだと思う。そして完成度をあげるために原稿の修正や直しで一生涯懸命になると、兎の目と頭脳が一番疲れてきて終わりがくる。

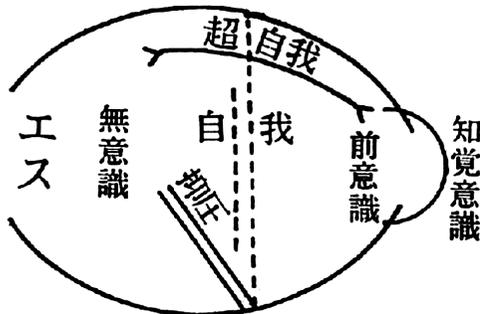
疾病から得る利得

深層心理学的観点から言うなら、「疾病利得」という秘密がある。つまり、この夜の亀と昼間の兎の協力関係には、病気を補う形で発達した能力の存在があった。その背景を語ろう。

私の実家は京都駅前にある開業医で、母も医院を手伝う多忙な家で、ラジオや蓄音機から流れる歌謡曲や和製ポップスを聴きながら育った。実は生まれつき目に外斜位という障害があるために、目を寄せて焦点づけるのが苦手で、昔からお習字やテレビがあまり好きでなく、次第に目を使わない音楽やラジオの世界にひかれていった。そこで意味や文字ではなく、音で判断する想像力や感受性が育まれたのだと思う。目に頼らず聴覚優位で、幼い頃は会話から言葉を吸収し、思春期は本よりも音楽、特に目を閉じて楽しむ歌詞やラジオで育った。何事も耳学問が多いというのもここからきている。

このように、私の目の状態は、心の在り方の多くを決定した。そして目と心の連動は私だけではなく、おそらく多くの人々に存在するものであり、日本語の「心の目」「心眼」という表現が証言している。以下のジークムント・フロイトの『続精神分析入門』に掲げられている心的装置の図も、眼球の横断の図と似ているが、心とは目のようなものなのだろう。

私の抱える外斜位とは潜在性の斜視、あるいは間欠性の斜視で、普段はそうは見えなくとも目を閉じると世界に向かう両目の位置が斜視のように大きく開いてしまう状態のことをいう。客



観的にはマイナーな解剖学的問題だが、私にとってはやっかいな問題だった。この障害は多くの人に存在するが、私の場合は生れつき程度が強く、両目を寄せることの困難から幼い時の書物嫌いや習字嫌いの傾向が生まれた。それでも斜視には移行せず、両眼で外を見ることを諦めていなかったのだ。すでに臨界期は超えて、両眼視、つまり二つの目で立体的にものを見ることを確立していたことになる。

そのため、眼精疲労で文字の世界から排除されている状態で、大学時代に本を読まなくとも音楽と共に言葉と遊べる作詞の仕事に携わったのも当然だと言える。語呂合わせや言葉遊びが大好きで、記号の意味の理解より記号との戯れを好んだ(言語学的に、こういうのを「シニフィアンの戯れ」という人がいる)。しかし本人としては目の障害は自覚しておらず、なぜ本を読むのが嫌いで耳に聞こえる歌や音にひかれるのか分かっていなかった。周りも習字嫌いや読書嫌いは「なまけだ」と捉えていたし、自分でこれをどうしようもできないのが情けなかった。そして今や、この混乱をこの目の問題によって説明できる。少年野球の外野の守備で飛んで来たボールに目を寄せる輻輳反射が追いつかずボールが二つに見えたという恐怖体験も、双眼の顕微鏡による医学部実習では視野が二つあるのでスケッチするのに少し混乱したという経験も、皆そうだ。そのために若い頃はかなり臆病だった。

そして遂に、この障害が発見されたのが京都府立医科大学の最終学年で、眼科の実習においてであった。カバー・アンカバー・テストという検査実習で、一方の目をしばらくカバーし、すばやくカバーをとって両眼視させると目が反射的に大きく動いて中央に寄るという現象が発見されたのだ。目を瞑るとリラックスして両目が外に大きく開き、目を開けると両目を寄せるために力が入るという現象、この発見のおかげで、いつも力を入れてものを凝視する癖や、読書ですぐに疲れるという傾向についての身体的な説明が可能となった。

そして同時に、手術で本が楽に読めるように

なる可能性もひらかれた。「本が読めるようになりたいか」と眼科の足立興一助教授は私に確認された。答えはもちろん「はい」だった。臨床的には目が疲れやすく、本を読めないのでは、卒業し国家試験をパスできないという懸念と、時々単眼で見るのが始まっていたので、複視を防いで両眼視を楽にしようという目論見だった。こうして手術を決断してくださった眼科教室スタッフと、同級生で手術の執刀医である久山元先生、赤木好男先生に心から感謝したい。発見から数ヶ月後、眼球の内側の筋肉を短縮するための一回目の手術は実行された。しかし視覚の末端の器官だけを加工しても、その後の構造が外に向かおうとするので、最初の手術では少し楽になったという実感があったが、一年くらいで元に戻ってしまった。無事医者にはなったが、再び私の視覚世界は一つにまとまりにくく、再び二つに分かれて見えやすくなり、単眼視と両眼視の間をゆらゆら揺れ始めた。後で説明するが、実はこれと連動する振り子のような運動が私の思考や生き方の基本となっている。

三十歳のロンドン大学留学での精神分析学との出会いで、本が読みたいという欲望はますます募った。帰国したばかりの頃の二度目の手術により、目が前方にきつく寄せられるようになった。「今度はきつめに」というのが私のはっきりした希望で、おかげでその後数十年は書物を両眼で読むことが非常に楽になった。もちろん加齢と共に元に戻るかもしれないという説明は受けていたし、人工的な前方への動きに抗し目の後方で外に開こうとする頭脳の動きも感じていた。

成果は予想を遥かに超えるもので、術後すぐに、私はそれまで禁じられていた精神医学や神話の本を貪るように読み始めた。文字が楽に見えるだけでなく、楽に書けるようになった喜びも忘れがたい。三十台から五十台までの執筆や翻訳の仕事はその喜びに満ちている。目の手術が成功していなかったら、こういう仕事は生まれていなかったかもしれない。

次いで、私は閉眼と開眼で自分の精神状態が変ることが分かった。覚醒して凝視することと

目を閉じて空想すること、つまり精神の集中と遊び、思考と空想、神経質と無神経、緊張と弛緩、言語と音楽、そしてその間の移行や中間の状態をある程度区別できるようになった。私はこの極端な二つを「言語脳」と「音楽脳」と勝手に呼んだが、それに応じて単眼視と両眼視の間を揺れ、そして二つの見方や考え方の間をふらふらすることが私の人生の基本となっていることにも気づいたのである。

兎角亀毛（とかくきもう）

先の比喩で言うなら、目を閉じると亀になり、目を開くと兎になる。もちろんこの表現は比喩だし、実は本当に亀になると兎は眠るのでこの亀を見たことがない。残念なことにこの病気は利得ばかりではない。年老いてからは、日中目を見開いて精神を集中する仕事では、頭の奥に大きな疲れを感じるようになった。これは読み書きだけではなく、話すという仕事において概ねそうなのだ。最近では、集中的にものを読んだり書いたりすることが少なくなって、書物嫌いが舞い戻ったように思う。さらに、目を瞑ると頭が楽になり、「素の自分」となるという変化があまりにスムーズになったが、これには相手を見つめずに心の理解を行う臨床家としては利点が多いところだ。

最近では、朝方目が覚めても、しばらくは寢床に横たわっているのが好きで、うつらうつらしていると中途半端な移行状態が長時間体験できる。つまり開眼して二つの世界を一つにまとめて立体的に見る両眼視と、閉眼して二つの世界を二つにしたまま並べて見る複視との間には、二重視という過渡的な中間状態もあるのだ。斜視か両眼視かの「どちらか」である大多数の人は、この「どちらか」という状態の存在に気づいていない。斜視の者にのみ許された特権と言うべきだろうか。これが、外を見ずに考える瞑想状態なのであり、昔からあったが、最近ますます自覚するようになった。

この中間状態では兎と亀の間は、色々な要素が入り混じるスフィンクスや人魚、鶴女房のような状態で、この生半可や中途半端への関心は

おそらく私の思考の特色だろう。それは外から見る限り中途半端で多面的な印象を生み、これを見る人たちを怖れさせることもある。古来「兎角亀毛（とかくきもう）」という表現があるが、亀に毛が生えたり兎に角が生えたりするというのはありえず、通常なら起こらないことを指す。しかし私的には、自分が亀でありながら兎だったりもするので、それはあり得る状態なのだ。

この身についてしまった兎と亀の交替が毎日リズムカルに繰り返され、その移行がスムーズであるうちは調子がいい。私はこの中間でこそ、本来の自分にまともり、一つに戻っているようだ。先ほども言ったが、そこでアイデアや歌が生まれる。患者についての理解や自分についての気づきも深まる。

実はビートルズのポール・マッカートニーの名曲「イエスタデイ」も朝方に生まれたいらしい。伝説では彼が目覚めると頭の中でメロディが鳴っていた。こんな曲知らないぞと思い、寝起きでピアノでメロディを弾いたらこの曲だったという。おそらく、夢見状態で音楽の国に行き、そこで見つけたメロディを覚醒と共に持ち帰るというのが創造性だろう。多くの人たちはそこに行っても、途中で忘れてくる。だから、行き来の途中が大事なのである。

だがしかし、そこはしっかり守られていなければならない。ボーっとしているので思いがけない事件や事態に遭遇したり、私の中の亀が日中紛れ込んで、言い間違いやひどい勘違いをやらす。電車で寝込んでしまい、何かの拍子で叩き起こされたりして、亀はそこがどこか分からなくなり、あわてて降車するので忘れものも増える。若いときは特にひどかったが、ありがたいことに大抵、それを神経質な兎が何とか失態をカバーし取り繕いを行ってくれた。ところが老いと共にほころびやボロが際立ってきたように思うが、それもどうでもよくなってくる。

さいごに

「人類は心理と現実とを関係づけるという重荷から解放されることはない」という意味の、

有名な精神分析医 D. W. ウィニコットの言説を思い出す。私は、この両面的で中間的な観点からの記述を「現実と空想の重ね合わせ」という困難としてイメージしてきた。自己の体験で言うなら、外に向かうのが兎で、ぼんやり空想しているのが亀である。この一つにまとめる際の重複という困難は、私の個人的な、そして眼科的な問題でもあったわけだ。詳細は一昨年書いた『評価の分かれるところに』に書いている。現代ではハイビジョンが理想化されているが、よく見えることを理想化しない視点というものが、そこではよく聞こえない、よく分からないことを扱うことになる。

さらに追加するなら、私たちは分裂と統合という時、このような目の体験に影響を受けて物事を捉えている。この図に示された眼科の問題の心理学的側面は、科学者スーザン・バリーの著書『視覚はよみがえる Fixing My Gaze』に詳しい。医学には長く、斜視あるいは二次元の単眼視と三次元の両眼視の間には取り返しのつかない臨界期という考えがあるが、若干修正されねばならない例外があるのかもしれない。自らの体験を踏まえて考えるのだが、斜視と普通の両眼視の間には混乱や困難の伴う様々な連続性があるのかもしれない。絶対の臨界期を設定するのは例外的なケースに応じていないのかもしれない。また、人格についても、「分裂している」と安易に表現することは取り返しのつかない事態を想定させやすいのだが、これも、重複をこえてやがて統合されることがあるという可能性はおおいにある。そういうことだからこそ、「分裂している」と形容された病が「統合失調症」という病名になったのだと理解することができる。

文 献

Barry, S. (2000) : Fixing My Gaze. 『視覚はよみがえる』(宇丹貴代美訳) 筑摩書房, 2010.

Freud, S. (1933) : Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse 「続精神分析入門」(懸田克躬・高橋義孝訳) 『フロイト著作集 I』人文書院, 1971.

北山 修 (2012) : 『評価の分かれるところ～「私」の精

神分析的精神療法〜』。誠信書房, 2013.

Winnicott, DW. (1953) : Transitional objects and transitional phenomena. 『小児医学から精神分析へーウィニ

コット臨床論文集』(北山 修監訳) 岩崎学術出版社, 2005.